高崎高校同窓会報

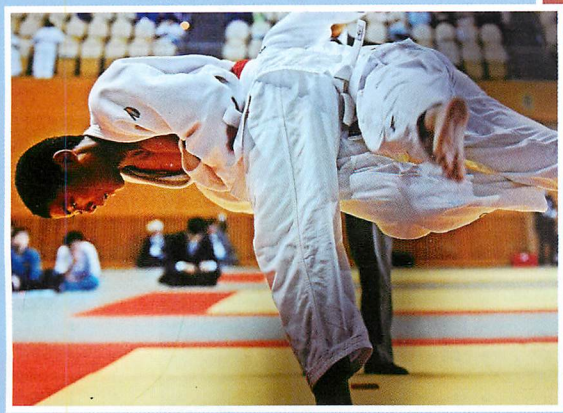
2021 No.55

発行所／高崎高校同窓会　〒370-0861　高崎市八千代町2-4-1 TEL.027-320-6024　令和3年11月30日

コロナに負けず 今年度躍動した現役生

全国高校軟式野球選手権北関東地方大会
（準優勝・対作新学院）

井上 直紀 君（3年・右から3人目）
全国高校総体100m決勝



オゾエメナ ソプル 涼太 君（3年）
国民体育大会（柔道競技）
県選抜正選手

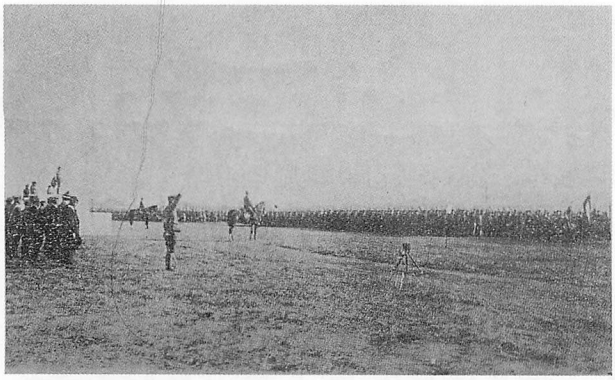
齊藤 嘉大 君（2年）
全国高校俳句選手権大会
個人賞入選

表彰式（第2位・井上 君、左から2人目）

「風吹きすさぶ學び舎」について

甲子園の高校野球のテレビ中継では、必ず対戦校の校歌が歌詞の字幕スーパーつきで流される。これを聞き眺めているのも結構楽しい。

さて、校歌には一種の約束事みたいなものがあり、ほぼすべての校歌が学校の四囲のロケーション、建学の精神、誇るべき偉業、学舎の偉容等を詠みこみ、その学校の誇るべき特色を表現したフレーズを高らかに力強く歌い上げて、他校との差別化を図っている。わが校歌もこの約束事に則っているのだが、学校の特色をアピールする部分がちょっと変わっていて面白い。そのフレーズは「バラの香匂う學び舎にて友よ」と「風吹きすさぶ學び舎にて友よ」だと思う。「バラ」は「指月庭」に咲き誇るバラで、これは井上房一郎先輩（15期）のご指導とご尽力で花開いたものである。



▲昭和9年陸軍大演習に御親閲拝受する参加者（乗附錬兵場）＝高高の東側

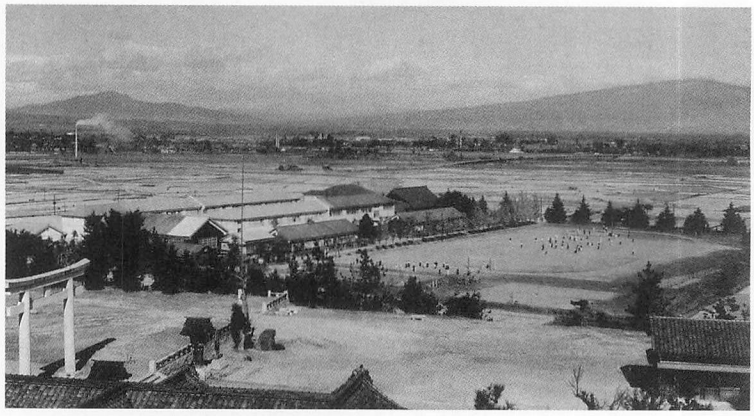
昭和29年、受験関係出版の最大手・旺文社社長の赤尾好夫氏が、講演で来校した際に、校門を入るや咲き誇るバラを目にして驚き、それが卒業生の献身的な尽力により造成されたことに大いに感動し、当時受験生の圧倒的多数が講読していた「蛍雪時代」の巻頭文に「バラの咲く学園」として紹介した。これが、それまで地方の一進学校に過ぎなかった高高の知名度を一躍全国区に押し上げた記念碑的な一文であり、これを本校の最大のウリとしてアピールするのは尤もなのだが、次の「風吹きすさぶ…」はどうだろう。自校を誇示するフレーズに「風」を使っている校歌は、少なくとも群馬県高野連加盟校にはない（高校野球県大会冊子調べ）。しかも風は風でも「風吹きすさぶ」とは。「吹きすさぶ」は字義どおりだと、動詞「吹く」の連用形「吹き」に「すさぶ」がくっついて「風が強まる・風が吹き乱れる」ことだそうだが、一般的にはどうしても「すさぶ」を「荒ぶ」と同義として誤解し、あかたも米国ラストベルトの廃工場のような荒寥とした情景を連想してしまう表現だ。びっしりと人家に囲まれ、整備された校舎や諸設備の中で学ぶ最近の生徒諸君にしてみれば、普段は歌い流してはいるが、このフレーズは現状からは想像できずピンとこないのではないか。

しかし、この校歌が作られた頃の生徒にとって、この表現は当時の高高の置かれた状況そのもので、よくもあの情景を表現してくれたと感心する。あの頃は学校の北、東には碓氷、烏の堤防まで一軒の家もなくただ田圃が広がるばかりで、八千代橋西詰近くにごみ焼き場の煙突が頼りなく立っているだけの荒寥たるものだった。そして、はるか谷川岳方面からストレートに吹きつける空っ風は、砂塵を巻き上げ、電線をうならせ、怒濤のように吹き寄せ校舎を揺らした。文字通り「風ふきすさぶ學び舎」だった。そんな中を、ガタ自転車を懸命に漕いで集まってくる生徒達の姿を目にして、前半のカラフルで穏やかな「バラの香匂う」と対比させ、荒寥として、激しい「風吹きすさぶ」と表現したのではないか。草野氏が事前調査に訪れたのが昭和32年2月であり、まさに空っ風の吹きすさぶ時季で、それがよほど印象的だったのだと思う。また同時に空っ風の中で苦闘していた前橋時代を追懐していたのかもしれない。

ともあれ草野氏は高高を取り巻く環境がこうも変わるとは、思ってもみなかったのではないか。空っ風も弱まり、家並みに囲まれ、整備された環境で学ぶ生徒達が、「風吹きすさぶ…」と大声で歌っているありさまを草葉の陰で苦笑しているに違いない。

蛇足、私は旧校歌が廃され、新校歌制定以前の「翠巒」を校歌としていた頃の在校生で、心のどこかに新校歌を受け入れない壁があるのか、新校歌が大好きで何百回も歌っているのだが、未だにこれを諳んじることができないでいる。これって心理学上何というのか、ご教示いただけたら有り難い。

（編集委員長　田端　穣）



▲風吹きすさぶ学び舎（昭和30年頃）

ご挨拶

高崎高等学校同窓会長（71期）

坂本　正樹

会長就任2年目となりました。

現在の最大の問題はWITH CORONAの時代における同窓会のあり方です。同窓会の目的は会則によると「会員交誼を厚くし、併せて母校の教育振興充実に協力する」とあります。「会員交誼」については、会合や宴会が出来ないことにより、懇親が図りにくくなってしまっています。このようなことが長期にわたると、同窓生各位の気持ちが同窓会から離れてしまう事態とならないか心配です。

2022年の新年懇親会については、91期幹事期諸君がなんとか開催できることを前提に広い会場を予約し、会食内容も簡素で個食となるよう配慮するなどして頂いています。どのような形にしろ何とか開催できるような感染状況となれば、と願うばかりです。また、ゴルフ大会は83期の諸君の尽力で感染防止に最大限の配慮をした上で開催でき、一筋の光となりました。さらに、同窓会報の発行という新年懇親会と並ぶ事業は、会報委員各位の努力のおかげで無事に出来ました。そして、なんと言っても会費の納入状況はコロナ禍以前と同程度であって、皆様の同窓会に対するお気持ちに変わりがないことが示されてもおり、私としてもひとまずは安堵しています。

一方「母校の教育振興充実」における最大のこととしては、翠巒育英会と教育後援会のご協力も得て8月2日に部活動等用のマイクロバスを寄贈できたことです。在校生諸君は従前と違い活動に大きな制約を受け、バス利用の機会も制限されるのでしょうが、公衆衛生に留意したうえで、このバスを最大限利用して様々な思い出を作ってもらえればと願います。

会長の任期は通例2期4年なので、ご信任をいただければ、今後も同窓会と高校の未来が燦と輝くべく尽力したいと決意しています。

高崎高等学校校長（81期）

小林　智宏

本年4月に加藤前校長の後任として就任しました。前校長同様、OB校長です。着任早々、新しいバスの寄贈をはじめ、施設設備や教育活動の充実のために同窓会の皆様から様々な御支援を頂き、感謝に堪えません。皆様の思いを受け止め、全力を尽くす所存です。よろしくお願い申し上げます。

さて、昨年度は、臨時休業の長期化や全国高校総体の中止など、学校教育にとって試練の年でした。本校でも、翠巒祭や米国研修の中止を余儀なくされましたが、修学旅行や定期戦は遂行し、進路面では現役合格率90%を超え、多くの生徒が第一志望校合格を実現しました。また、スーパーサイエンスハイスクールとしての実績が評価され、第4期（2021～2025年度）の申請が認められました。加えて県により、全国に先駆け、1人1台端末のICT（Information and Communication Technology）環境が整いました。

今年度はそれらを踏まえ、ICTを積極的に活用しながら、教育活動の充実を図っているところです。

米国研修は今年度も断念せざるを得ませんでしたが、代替としてオンラインにより、米国以外にも様々な国の研究機関等と繋がるプログラムを実施しました。

翠巒祭は無観客としましたが、生徒は意義を再認識し、来年度も見据えて、巨大壁画やアーチを含め全ての企画を遂行しました。来年度の開催時には、是非御期待ください。

コロナ禍の予断を許さぬ状況が続いていますが、できることを最大限実施したいと考えています。そうした中、「先輩、教えてください！」を今年度も実施させていただき、各界で活躍されているOBの方々から直接様々な御教示を頂けたことは、大変ありがたいことです。

また、今年度、本校は自転車ヘルメット着用のモデル校となっています。これについても、同窓会の皆様からふるさと納税を通して御支援を頂き、生徒は高高生として一段高い自覚を持って通学しています。

3F精神と文武両道の伝統をしっかり継承し、発展させてまいります。引き続き、御理解と御支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

潮流　54期

文学・芸術は「不要不急」なのか。

吉永 哲郎
元高崎高校国語科教諭

東京五輪スケートボードの中継で、解説者塩尻稜さんの「よくやり切ったっスよ」「鬼やばいっスね」という語りと、実況アナウンサーとの言葉のやりとりを聞いていて、実況放送が様変わりしたなと感じました。運動部の男子がひろめたといわれる「そうっスね・マジっすか」の言葉は、社会言語学者中村桃子さんによって「ス体」と命名されていますが、違和感のあった言葉が、今は運動部男子のコトバとして親しみを覚えます。ただ、いまだに「ラ抜きことば」にはなじむことができませんが、ことばは時代によって移り変わっていくもの。現代はその移りの速度が速いように感じます。

小学校入学時に教科書をもらった時、国語はすぐ手にしてその日に読み、興味をひく物語があれば、教室でどんな風に先生は話してくれるか楽しみでした。高校の国語教科書は、定番の「こころ」、「舞姫」、「羅生門」、「山月記」などが、本文を抜粋されて載っていました。現代ではこれらの教材に何の意味があるのか、受験に必要なのかと批判されています。その上、OECD（経済協力開発機構）加盟国で行われているPISA（15歳児の学習到達度調査）の結果で、戦後の国民教育は評価されましたが、日本の学生たちの実用文読解記述式問題の成績や人間が本来もっている創造性に関しては、世界的な水準から見て、十分でなかったことなどが一因となり、大学入試改革と高校学習指導要領改訂の声が関係筋で高まったといわれます。高校の選択科目が「文学国語」「論理国語」「国語表現」「古典探求」に分けられ、入試などの連動によって実際上は「文学国語」は履修しにくくなると予想され、鷗外や漱石など知らない、優れた日本語表現の言葉に触れない生徒が、世の中に多くなるというわけです。こうした文学軽視の改訂を危惧する声を特集した、雑誌や新刊新書が本屋さんに並びました。しかし世の中には、文学作品は実社会には不要だとして、文学とか小説教材を徹底的に嫌悪する人がおり、改定に賛同する声も聞かれます。また国語力の低下を嘆き、若者批判する老人もおりますが、現実には老人の好みであろうがなかろうが、新しいことばで物語は紡ぎだされています。コロナ禍の影響を受けた多彩な創作活動（金原ひとみさんの「狩りをやめない賢者ども」・樋口恭介さんの「BV-47」・砂川文次さんの「ブラックボックス」など）を見てもわかります。

文学軽視の改訂の課題で、学校現場の言語環境変化に関する対応について、これまでになかった問題があります。それは、高校によっては外国籍、さまざまな言語体系の若者が増えているという現実です。学校では日本語、家庭ではスペイン語やポルトガル語を使っている学生。多様な背景を持つ学生たちの日本語が存在するようになってきました。もはや日本人だけの日本語ではなく、改めて世界の言語での日本語とはどのような言語か、どのような文化の中で培われてきたのか。こうしたグローバルな視点から日本語を捉える時、日本の文学、古典への重要性が問われているということです。

作家でミュージシャンの辻仁成が雑誌「中央公論」で、両親が日本人のパリ生まれの息子が、フランスの国語教育を通してフランス語を習得していく過程を書いていました。小学校入学するまでフランス語を喋らなかった息子が、入学後、抑揚のないフランス語の詩を自室で朗読し始めました。フランスの小学校では、一年生から卒業するまでに毎週一編の詩を暗唱させます。卒業するまでには、フランスの古典的詩人の代表的な詩を暗記していることになります。息子のフランス語の教師からは、「家庭教師をつけるよりも、まず、文学に触れさせることです。できるだ

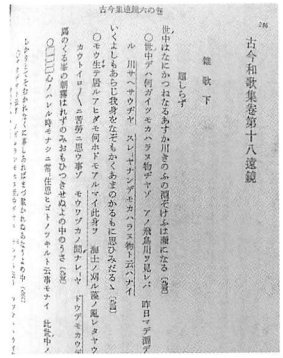
け多くの文学作品を読ませてください。あなたのお子さんだけでなく、フランスでは子供たちを文学の中に置きます。」といわれました。つまりフランス語の授業では徹底的に、フランス作家の作品からフランス語的言語感覚を学び、毎週の詩の暗記からは自動的に子供たちのフランス語感覚の基礎を築くことになります。こうして学年を重ね文学的素養は成長し、子ども自身がフランス語人として強い批評眼や哲学を持つようになったことは、「フランスで生きる上で、あるいは世界へ出て行くために大事なことは何だと思いますか。」との問いに、「それは自国の文学をしっかり学ぶことだと思います。」と答えている息子の姿から理解出来たと記していました。そして、日本のように文学を切り離した国語学習では、世界に通じる若者が育つかは疑問だと結んでいました。ふと私は、「覚えなくてはならない日本の詩は？」、と頭をよぎりました。

さて、コロナウイルス感染の猛威の中、フランスではカミュの「ペスト」がよく読まれるようになったと伝えられます。ヨーロッパには、ボッカチオの「デカメロン」、デフォーの「ペストの記憶」、ル・クレジオの「隔離の島」などの感染症文学の伝統があります。感染のリスクや外出制限など、先の見えない不安の中で過ごすなかで、小説の登場人物と共通する生きる姿を見出し、コロナ禍を生き抜くよすがとして、読まれているようです。特に「外出制限」の実態は戦争下の意味を含むことがわかります。

近世・近代日本文学研究者のロバート・キャンベルさんはある対談で、「日本の教育では、古語を読解するためのツールとして文法は教えるが、日本語の成り立ちや構造、文法に関してはあまり教えていない。」と述べ、更に市民社会の中で、人間が本来の創造性を追求するさまざまな能力や、幸福を追求するための重要な基礎的な力は、「言葉をどう学び、その中で自分の思考をどう豊かにしていくかということに深く関わる」とし、「古典を含めた広義の文学は非常に豊かなソースだ。」と述べていました。政治家や医者の書く文章、生命科学や生物に関するものを含めたあらゆる分野の書き物を文学として捉え、その豊かなソースを通して自分の中の思想を豊かにしていくのが、現代の学びの姿だと、文学軽視の改訂を含めキャンベルさんは強調しています。

昨年の春、新型コロナウイルス感染者が1000人を超えたイタリアで、休校中のミラノの理系名門アレッサンドロ・ボルタ高校のドメニコ・スキラーチェ校長が、学校のホームページ上で生徒に向けたメッセージが話題になりました。その冒頭に「混乱のさなかにあるいまこそ、この本をじっくりと読むことをおすすめします」と、19世紀の作家、アレッサンドロ・マンゾーニ（1785～1873）が、17世紀にミラノで流行したペストにより、街が打撃を受けた様子を描写した国民的文学作品『いいなづけ』（イタリアの中学校の国語教材）の一節を紹介しながら、社会生活や人間関係を「汚染するもの」こそが、新型コロナウイルスがもたらす最大の脅威だと説きながら紹介しています。校長は「こんな時にこそ良い本を読んで欲しい」と勧め、「集団の妄想に惑わされず、冷静に、十分な予防をしたうえで普通の生活を送れ」と呼びかけています。

今回の改訂では、文学否定と「必修科目から古文漢文はなくすべきだ」という急進的古典否定論があります。世界ではコロナ禍での自粛時間を有効に活用して、古典や文学作品を読めと訴える共通した指導者の姿がありますが、わが国はそれとは逆行する空気が若者を包んでいます。私が思い出すのは、戦後の占領政策にともない教育改革がなされ、戦中の教科内容が否定され、古典漢文の授業は表立ってはできないという状況です。その時、本校の国語科は、古文教科書とは別に学年を追って古今集・伊勢物語・源氏物語の本文を抜粋した大学教養課程の教材を用い、漢文は藝術科目の選択科目として存続させた独自な教育課程を組み、日本文化否定の戦後教育の中で日本古典を学ぶ機会をもちました。先生方の中には、古今集は本居宣長の「古今集遠鏡」、源氏物語は北村季吟の「湖月抄」といった近世の古註をもとに講義なさった方がおられました。それは前時代的な講義でしたが、今思いますと、戦後の疲弊した精神からたちなおるきっかけを、「教え子を戦地へ二度と送ってはならない」という意識のもとに、本校の将来の国語教育の礎を築こうとした意味をもっていたと思います。


古今集遠鏡六の巻
古今和歌集卷第十八遠鏡
雜歌下
本居宣長「古今和歌集遠鏡」（本校所蔵）

北村季吟「源氏物語湖月抄」（筆者所蔵）

本校の先輩である歌人土屋文明は、中学校4年生の時「歌をやろう」と思い立ち、木版印行最後の橘千蔭の「万葉集略解」を父に入手してもらい、英単語のカードを作るように万葉歌をカード化し通学路上で暗記し、2～3箇月で4500余首を覚え、歌人への道を歩み始めました。コロナ禍の混濁した世相に生きる中、先輩の一途な激しい学びの姿から、何か学ぶことがあるのではと、ここに記しました。

橘千蔭「万葉集略解」（筆者所蔵）

寄稿

52期

新高会

元国家公務員　国土庁防災局長等を勤める

三木　克彦

一　高崎高校五十二期生と呼ばれる人々は、昭和九年～十年の生れで、戦中戦後の教育制度改革の影響を強く受けた世代である。昭和十六年小学校入学の年に国民学校に改組され皇国教育を受け、敗戦の折には、教室で修身の教科書を塗り潰す体験をしている。戦後、六三三四制への抜本的教育改革で、中等教育は義務教育である新制中学校と選抜入学制の新制高等学校に区分されることとなり、私は高崎市立南中学校に入学し、新しい形での中学生活を体験する。昭和二十五年県立高崎高等学校の入学試験に合格し入学する。白線二本の学帽が許され、高崎駅裏からの四十分の徒歩通学が誇らしかった。入学の秋、校舎が火災に遭い、二週間の跡片づけののち、旧高崎連隊跡の仮校舎に転学する。旧制高崎中学校の伝統であった文武両道は、スポーツ、吹奏楽、文芸などの部活動として盛んであり、特にスポーツ関係は、ラグビー部などがグラウンドを活用して猛訓練を行ない、各地の大会で好成績を挙げている。やがて乗附の校舎が落成し復校する。三年生となり、受験が強く認識され、市内からの自転車通学が許され、クラブ活動も休みがちとなる。昭和二十八年卒業し、我々は進学、就職それぞれの道を歩む。

二　卒業後十年余を経て五十二期生の会が発意され、設立される。定例的に会合会食し、語らい、懇親の場となったという。次第に輪が広がり、近県の就職者、居住者も巾広く参加するようになる。地方勤務を終え、在京勤務居住となった私も常時参加となった。会を重ねるとともに対立や口論もあり、呑み過ぎもあったが、在学中以来の長い友好的な雰囲気が支配的であった。会合を通じ多くの貴重なものを学んだと思っている。中年期には、ゴルフが流行るとゴルフ会が開かれるようになり、競技を楽しみ、技を競った。

老年期に入り定年退職者が増え、時間にゆとりが生じた頃には美術クラブ三人衆により、新高会作品展が開かれるようになり、油絵、写真、書、陶器などが、画廊萩原に展示され、多くの人々の鑑賞、懇親の場となった。

老齢深まり疲労感を感じられる頃、六代会長・古関武企画統括、五代会長・深沢岩吉編集代表で、入学六十年記念随想集「七十五歳の想い」が、次いで五年後には「傘寿の誌上クラス会」が刊行される。

「七十五歳の想い」には投稿者六十七名で入学以来の自己経歴や自分史が多く、六十年に及ぶ努力と哀歓を伝えている。

卒業後は、医師、教師、研究者、スポーツマン、芸術家、宗教者など経歴は多彩であり、公務員、公共公益団体、福祉関係、団体への勤務者も多い。日本経済の復興から成長成熟の役割を果たした産業界において活躍した人材も多く、幹部職員となり、関連分野の経営者や経営トップとなった人材もある。

自ら起業した経営の成功者も多く、家業の企業化や農業の多角化に成功した人々もいる。

総じて、業界発展のための努力や公務遂行の功績に対し、表彰、叙勲などの授章者が輩出するが、新高会としては祝賀の会を開催している。

八十路に入った「傘寿の誌上クラス会」の寄稿者は九十九名。便は三つに大別される。一は老の楽しみの明るい報告で、コーラス、社交ダンス、楽器演奏と巾広いなか、「旅」が圧倒的に多く、世界のさまざまな様子が精巧なカラー写真とともに伝えられる。二は、各地に定住した人々の幸い多い生活を伝える、無沙汰を謝る人々で、望郷、志都の想いがにじむ。三は病重き人々からで、惜別の想いが伝わり、心が痛む。

刊行後、出版記念会が開かれ、カラオケ、酒店など二次、三次と別れを惜しんだ。

こうして長年の新高会の幕は降りた。

寄稿

62期

降ってわいた堤ヶ岡飛行場 嵐の中の二年三か月

98式直接協同偵察機をバックに

元群馬町教育委員会教育長

鈴木　越夫

私は昭和三十二年に、堤ヶ岡村棟高にあった群馬中央中学校に入学しました。校舎は飛行場の兵舎を改修した建物で、突かい棒があり、砂ぼこりが舞い込む教室でした。戦場から戻られた先生もおられました。二学年の途中から現在のソシアスの所に建てられた新校舎に移りました。

時は移り、私は教員生活の最後を母校の校長として勤務させていただきました。群馬町が高崎市と合併した後、かみつけの里博物館の館長を拝命しました。この時、多くの地元の古老たちが来館し、語ってくださった堤ヶ岡飛行場の話に強く興味を持ちました。昭和十八年五月、飛行場建設に伴う用地買収の件で、関係者は村役場に呼び出され、降ってわいた話に村人達は驚き、村全体が暗く沈んでいるようだったと言います。長閑であった農村が一転、嵐の渦に巻き込まれたのです。「家屋も墓地も移転させられた」、「田畑を取り上げられたので軍需工場に勤めた」、「モッコやトロッコで整地した。小学生も草刈りに動員させられた」、「一日に二千人を超える人が動員された日もあった」、「お腹を空かせている兵隊や工員にふかし芋をやって喜ばれた」、「特攻隊員が泊まりに来た。特攻隊の見送りをした」、「敵機に見つからないように飛行機を竹藪に隠す手伝いをした」等生々しく語ってくださいました。市町村誌には載っていない貴重なお話でした。

この人達が元気なうちに「戦時中の記憶を記録したい」と思いました。そして、「戦時下に生きた青少年の体験記―生の声」を平成二十六年より第五集まで出版しました。近年多くの人達が、戦時中の実相を孫子に伝えたいと思うようになってきたのでしょう。四百人程の体験記が収録できました。多くの翠巒の先輩方も執筆してくださいました。

堤ヶ岡飛行場（正式名称：前橋陸軍飛行場）の二年三か月の役割の概略は次のようになります。

太平洋戦争勃発当初は優勢でしたが、ミッドウエー海戦（十七年六月）の敗北後、窮迫する戦局を打開するために「飛行機の増産と飛行兵の養成」が急務となりました。そして飛行学校の候補地として白羽の矢が立ったのが、堤ヶ岡、国府、中川地域でした。十八年五月二十一日、用地の買収調印、翌日から造成開始。十九年八月一日完成。宇都宮飛行学校前橋教育隊として開校。少年飛行兵約八十名、特別操縦見習士官約百五十名。十月九日に熊谷飛行学校前橋分教場となる。

堤ヶ岡飛行場の位置（正式名称：前橋陸軍飛行場）

二十年二月十日、太田の中島飛行機製作所が空襲を受け、堤ヶ岡飛行場の格納庫が中島飛行機の分工場となる。「疾風」月産三十機でした。資材不足で達成できませんでした。

格納庫前の整備兵等

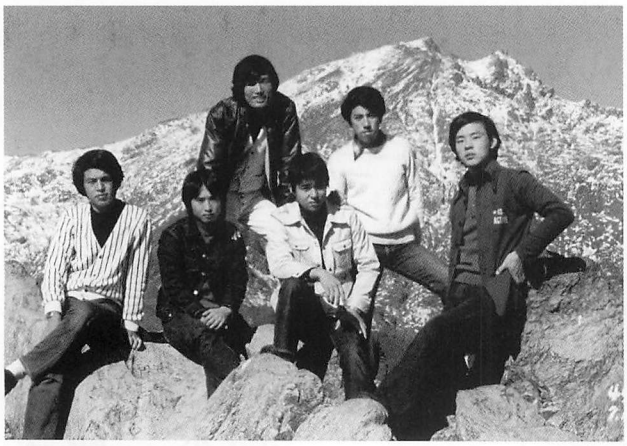
二十年三月五日より、誠第三十六・三十七・三十八飛行隊の訓練基地となる。その誠隊が今注目を浴びています。沖縄の古宇利島沖、水深四十メートル海底に米軍駆逐艦エモンズ号が沈んでおり、その近くで誠隊の特攻機のエンジンとプロペラが確認されています。

私の編集した体験記を基に飯塚俊男監督がドキュメンタリー映画「陸軍前橋飛行場―私たちの村も戦場だった」を製作してくださいました。文科省選定映画となりました。

戦後七十六年が経ち、戦争を体験した人たちの手記、写真や当時の生活資料等が今処分されようとしています。それらを残し、次の世代に繋いでいくことの大切さを感じています。そして若い人達が平和や戦争を考えるときの一つの資料にしていただきたい、と思っています。

寄稿

72期



高3の11月、天神平にて。
左から下村博文、竹渕昭彦、中野三智男、黒沢公雄、梅山知一、筆者

指月庭で遡行した半世紀

高崎健康福祉大学副学長
石田　朋靖

今年（令和2年）の5月、公務で近くまで行った折に、半世紀ぶりに薔薇の香匂う学び舎に立ち寄ってみた。校舎は変わり、校門前の真下商店は民家に変わっていて寂しい思いもしたが、指月庭や校舎に沿った花壇に咲き誇る薔薇は、半世紀を遡行する水先案内としては充分な役を果たしてくれた。

思い返すと、ど田舎生まれの優等生にとって、高高での生活は人生の大きな転換点だった。自意識の目覚めによる混沌の時期、自らを解放できる下宿生活と高高の校風とが相俟って、今の自分が形づくられたと思う。

一年の時には高崎哲学堂設立準備会が主催する湯川秀樹さん、あるいは梅原猛さんや梅棹忠夫さんといった京都学派の先生方の講演を伺い、学生紛争から派生した制服自由化闘争の全学集会に参加する中で（まだまだ子供で優等生意識から抜けきれなかった私は、怖くて私服通学はできなかった）自由に物事を考えるという意識が育まれた。

所属したのは数学部。ほとんど活動がないのをいいことに、7～8人の友人たちと入部し、校舎西側の階段横にあった部室を我が物顔で使わせていただいた。少年マガジンや平凡パンチを読みながら弁当を食べ、休み時間や放課後には毎日のように飽きることなくセブンブリッジをしながら下ネタから上ネタ（?）までを延々と。人それぞれの感性や苦悩へのリスペクト、互いの間合いの取り方など、多くのことを学んだ時間だった。

しかし、何といっても懐かしいのは3年8組、通称“坂田組”。英語の坂田英明先生のクラス。「マー好きにやれヤ」の言葉に後押しされた奔放な受験生の集まりだった。チェリオの瓶が何十本も並んだ教室で、夏は海パンのまま授業を受ける生徒たち。そんな中で私が期待されたのは早く帰れるように時間割を変える交渉役。一つでも休講のコマがあれば、遅い時間の授業を移してもらい、それでも間のコマが空いてしまうものなら以降の授業の休講をお願いして回り、“家で勉強するから”と昼には帰れるよう交渉する。何と自主性を重んじ生徒愛にあふれた先生（?）の多かったことか。ただ早く帰って受験勉強をするなんて生徒はいなかったはず。友人と“街”にでて喫茶店、本屋の立ち読み、ピカデリーでの旧作二本立て洋画…。一浪がヒトナミと読まれた時代だったとは言え、他校では聞いたことがない。そう言えば、呑気な高高生も少し焦り始める3年の11月、坂田組の4人に準構成員2人を加え、学校をサボって谷川岳に行ったこともある。天神平まで登り、あるいは麓の水辺で紅葉を楽しみながらハイテンションになって騒ぎまわった。それやこれや、坂田先生の言葉通り好きにやらせていただいた受験生たち、頭にあった受験への重圧から一瞬でも眼をそむけた奔放な行動によって精神の安定を保つことができ、またチクリと感じる罪悪感を共有した悪友たちがいたからこそ、ストレスを乗り切れたのだと思う。後日談になるが7年前に宇都宮大学の学長に就任した時、任命者は坂田組の準構成員だった下村博文文部科学大臣。手交は事務次官だったが、後日に大臣室で歓談した折、サボって出かけた谷川岳の話などなど、お互いの立場上秘密の話だと大笑いした。

こうした友人たちとの交流は今に至るまで途切れなく続いているが、いずれにしても、青年に向かう自分探しの混沌の時期、生徒たちを信じ、おおらかに支えてくれた高高の自由な環境と、さまざまな経験を共有した悪友たちへの感謝を思い起こさせてくれたのは、指月庭の薔薇だった。（以上は東京同窓会令和2年10月発行の翠巒66号への寄稿に加筆微修正を加えたものです）

思いもよらず、今年の4月から48年ぶりに高崎に戻ることになり、高高が身近な存在に戻ってきた。非公開だった翠巒祭のゲートや薔薇を道端から眺め、街中を通り過ぎる後輩たちのTシャツの襟元に校章を眼にする。そんな時、新たな職場で逡巡する背中が優しく押される気になる。母校は高齢者になっても新たな旅立ちを支えてくれていた。

寄稿

82期

「高崎市と世界をつなぐ」学校づくり ～あの頃と現在の私～

高崎市立高崎経済大学附属高等学校　校長
新部　雅之

このたび執筆依頼をいただき、僭越ながらお受けすることになった次第です。高高時代の自らの行状を棚に上げつつも、教員として高等学校の教壇に立ってから三十余年が過ぎました。何時かは母校の教壇にとの思いは未だ果たせずとも、現在、地元高崎市内の高等学校に校長職として任ぜられ、少々大げさに申し上げますと、母校高高に勝るとも劣らない学校づくりを目指し、日々職務に勤しんでいるところでございます。

私自身、高高時代にはお世辞にも優等生とはいえない生徒でありました。このことは決して謙遜ではありません。田舎育ちの私は、中学校時代までは勉強も運動もまずまずとの自覚はありました。しかし高高への合格を喜んだのも束の間、各中学校からの精鋭が集まる集団に入り、全てにおいて自信喪失。そんな自分が嫌になり、高校生活のスタートは最悪なものでした。この頃の苦しい思い出は、私の教員人生の原点ともなっています。

その悩み多き高校時代、先輩に誘われて入った応援部でリーダー公開祭（翠巒祭）の舞台に立ちました。そこから私の高校生活が大きく変わったといっても過言ではありません。応援部での活動は、皆様にいろいろなご迷惑もおかけしましたが、毎日がたいへん充実しておりました。当時は学業などそっちのけで動き回る日々でしたが、硬式野球部の皆さんの大活躍により春の選抜甲子園大会に初出場した際には、アルプススタンドの大観衆を率いて応援の舞台も経験させていただきました。また学校行事に際しては、毎回、全校の生徒を前にして「翠巒」斉唱を仕切らせて頂いたこと。これらの経験は、母校高高に対する強い愛校心と、自らに対する確かな存在感や自信を与えてくれたものと思っております。

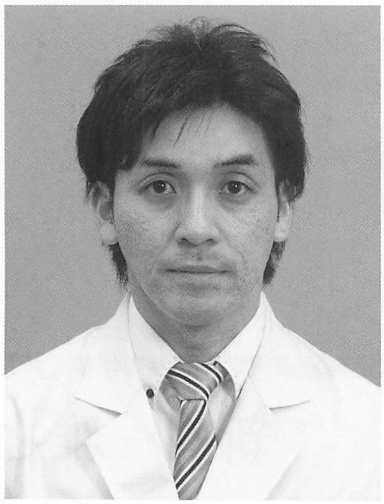
実は、その後に進学したH大学でもバリバリ硬派の空手部（前首相S氏も部のＯＢです）の副将として、非常に厳しい上下関係の中で過ごすことになりました。そんな経緯もあり、学生時代までは基本的に男の社会で育った私ですが、教職に就いてからはM橋女子高校やT岡東高校で女子教育に携わる期間が長く続きました。当初は女子生徒に対する指導への戸惑いも多々ありましたが、生徒達の資質や能力の高さを改めて実感し、性別にこだわらない男女共同参画による社会づくりの大切さを強く意識するようになりました。

せっかくの機会ですから、近況報告として現任校の紹介をさせていただきます。本校は、前身の「高崎市立女子高校」を礎として、平成6年に高崎経済大学の附属高校として開校した男女共学普通科の進学校です。高崎市唯一の「市立」高校として、「高崎市と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材の育成」を本校の使命と心得ております。お陰様で市民の皆様方からの多大なるご支援もいただき、充実した教育活動を実践することが出来ています。少子化の現在にあっても1学年8クラスを維持しており、手前味噌ではありますが、入学定員に対する志願者の倍率は、有難いことに県内公立高校の中では常にトップクラスの人気校です。本校の特色は、とにかく教育活動が多彩であること。高崎経済大学や地元企業との連携、国際理解教育等を柱とする探究的活動「TSUBASAプロジェクト」をはじめとして、芸術コースの設置や、生徒全員に貸与している「iPad」の積極的活用など、常に時代の最先端を意識した学校づくりを進めております。男子だけの伝統を誇る母校とは一味違い、明るく進歩的な校風を大切にしているところです。もし皆様のお近くで男女共学の進学先を検討している中学生がいらっしゃれば、ぜひご紹介いただければ幸いに存じます。

以上拙文にてたいへん失礼いたしました。最後になりますが、同窓生の皆様方には、高崎周辺でモスグリーン色の制服を上品に着こなす高校生を見かけたら、それは私の大切な教え子達ですから、母校高高の生徒と同様に温かい目で見守っていただけると幸いです。

寄稿

102期



近況報告と水泳・登山のお誘い

医師
松井　利晃

平成15年（2003年）に高崎高校を卒業して、現在は埼玉県で医師として働いている松井利晃と申します。今回、中学・高校の同期である友人から同窓会誌へ投稿する機会をいただきました。今回の記事が、疎遠になってしまっていた高校時代の同期や先輩・後輩と連絡をとる良いきっかけになれば幸いです。

高高では水泳部に所属し、同期は5人で、多くの先輩・後輩、さらには新任で水泳部の顧問（当時）であった清水先生とともに、部活動で切磋琢磨した思い出があります。私は理系の中では少数派の生物選択クラスで、生物教諭の柴田先生には3年間担任としても大変お世話になりました。高校卒業後は群馬県外の大学（農学部）へ進学し、修士を取得してから一般企業へ就職、その後医学部へ学士編入学し医師免許を取得しました。医学部卒業後は群馬県内の病院で初期臨床研修を行い、研修終了後からは群馬大学の腫瘍放射線学教室に所属し、現在は埼玉県内の関連の病院で勤務しています。

私は高高を卒業してから研修医として群馬に戻るまで13年間、東京・中部地方・中国地方と転々としていました。その間、同期や先輩・後輩とは時折連絡をとり、交流を持っていました。群馬を離れている間の高高との繋がりは自分と学年が近いもの同士だけでしたが、群馬に帰ってからは、学年を越えた高高での繋がりを実感しています。職場の病院には高高出身の方がいらっしゃり、さらに高高時代の同期が医師の中堅所として医療の最前線で活躍していました。高高では後輩にあたる、数年歳下の研修医同期もできました。前高出身の同期とも仲良しです。遠回りして医師になった自分は、周りの医師より経験年数・経験値の点でかなりの差ができてしまったなと実感しています。とは言え、自身を卑下しても生産性はなく、遠回りした自分の経験を医師として活かすよう尽力することが現在の目標です。

数年前には高高水泳部のOB会も発足され、夏の県高校総体後には現役部員を焼肉で激励するといった会にも参加させていただきました。OB会では、いままで関わりがなかった水泳部OBの方々と新たな繋がりができるなど、公私ともに貴重な繋がりを得ることができています。現役の高校生と話す機会もいただき、見たこともないおじさん達に囲まれてオドオドする高校生の姿はとても新鮮で、「応援したがるOB」に自身がなっていることに気がつきました。可能であれば今後もこの繋がりを広げ・強めていきたいと考えています。もしこの記事をご覧になった方で高高水泳部の方がいらっしゃれば、お声かけいただければと思います。新型コロナウイルス感染症が収束するころに、みんなでお会いできれば嬉しいです。

私事では最近は山に興味があり、時間を見つけては山に赴くようにしています。群馬県は多くの美しい山があり、高校生の時には気づかなかった群馬の魅力を強く感じています（写真は谷川岳の天神平です、雪山登山にも挑戦中です）。群馬の山に行く時には、生物学教師の柴田先生のことを思い出します。自然と野鳥が好きとおっしゃっており、私たちの学年が卒業してからは、希望で尾瀬の高校へ赴任されたと伺いました。高高卒業後に、柴田先生から近況報告のお手紙をいただきましたが、当時不束だった自分は返事を出さずにいてしまいました。その事を今も後悔しています。機会があれば、どこかの山でお会いできたらと思っています。

高校生時代には想像できなかった自分が今います。医師として働き、時には群馬の山に赴き自然を愛でる。最近水泳はほとんどやっていません・・・。マスターズの大会などに出場していたので、新型コロナウイルス感染症が終息し大会が開催されるようになれば、水泳部OBにも声をかけて皆で出場できれば素敵だなと思っています。

新型コロナウイルス感染症を現場で診る機会も増えました。今はただただ、自身と皆様の健康を願ってやみません。

◆◆ 公益財団法人「翠巒育英会」◆◆

担当者：中村康晴（73期） PR

事業目的

（基本方針）

社会に有為な人材育成を図るため、群馬県立高崎高等学校に在籍する生徒に対し、奨学金給付事業などの教育奨励事業を行う。

（事業内容）

基本方針を踏まえ、3点の教育奨励事業を行う。

1 奨学金給付
経済的困難かつ学業優良な生徒に対して、公募によって申請のあった者に、必要資金の全部又は一部を助成

2 学校教育補助
学習活動、部活動など生徒の教育活動の中から、質の高い推奨すべき活動を行い、全国大会へ出場する者に対して、必要資金の全部又は一部を助成

3 教育環境整備補助
学習活動、部活動など生徒の教育活動の中から、質の高い推奨すべき環境整備を選考し必要資金の全部又は一部を助成

令和２年度事業報告

令和2年 6月3日	第１期分奨学金交付【360,000円】（３年３名・２年生６名）
6月22日	第1回 評議員会（書面による表決） 【令和元年度 事業報告・決算報告、令和２年度事業計画・収支予算、令和２年度理事・監事の選任等】 第1回 理事会（書面による表決） 【令和元年度 事業報告・決算報告、令和２年度事業計画・収支予算、令和２年度理事・監事の選任等】
6月30日	令和２年度奨学生採用選考会（申請者８名・採用５名
7月14日	奨学生採用通知書伝達式（１年５名）
7月14日	第１期分奨学金交付【200,000円】（令和２年度採用１年５名）
9月2日	第２期分奨学金交付【560,000円】（１～３年14名）
12月3日	第３期分奨学金交付【560,000円】（１～３年14名）
令和3年 1月27日	感謝状郵送（同窓会総会中止のため） 【敬称略】高橋 昭雄（59期）、小林 優公（66期）、串田 紀之（67期）、堀口 廣政（67期）、大井 利之（77期）、戸塚 泰聖（77期）、加藤 聡（78期）、冨永 伸樹（78期）、田中 仁（89期）、89期同窓会新年総会幹事
3月24日	第２回 評議員会（書面による表決） 【令和３年度事業計画案、予算案、資金調達・及び設備投資の見込みについて】 第２回 理事会（書面による表決） 【令和３年度事業計画案、予算案、資金調達・及び設備投資の見込みについて】

奨学金給付状況

１年生……５名
２年生……６名
３年生……３名
給付金額：10,000円×12ヶ月×14名＝1,680,000円

令和２年度決算書

（単位・円）

■収入

正味財産（基金）運用益	4,236
寄付金	2,666,000
雑収益	50
合計	2,670,286

■支出

事務費	奨学金	1,680,000
	学校教育補助事業 （全国大会へ出場した部活動への補助）	5,000
	事務処理委託料	300,000
	支払手数料	268,895
	通信運搬費	8,694
	振込手数料	880
	雑費	2,949
管理費	交通費・消耗品費	0
	支払手数料	1,700
	雑費	465
合計		2,268,583

2,670,286－2,268,583＝401,703（正味財産増額へ）

■正味財産（基金）

＊当期末残高　52,262,466

（注）上記決算書は当法人の決算書の様式と異なりますが、皆様にわかりやすくするため、一般的な収支報告書の様式で表示しました。

歴代役員のお名前を21ページに掲載しています。

◆◆掲示板◆◆ 同期の皆様へ

49期 髙橋　一夫　Tel.027-362-9043

年1回開催の歴史を重ねてきた49期同窓会。コロナ禍は収まる気配なく、70回目、最終会を目前に2年続けて中止。本当に残念。来年は、良い知らせをお届けしたいもの。同期諸兄のご健勝と事態の好転を祈って居ります。

50期 八木　資親　Tel.090-5393-7520

y.yagi.1932-yoshi.docomo

卒寿を迎えた諸兄お元気ですか。先の太平洋戦争と敗戦を多感な少年期に体験し、学制大改革後の高高（高中）在学・卒業から七十数年が経ちました。一日も早いコロナ禍の収束を願い、五〇会の再開催を切望しています。

52期 深澤　岩吉　Tel.090-4954-7045

皆様、如何お過ごしですか。現在はコロナ禍で大変ですが、収束したら同窓会新年会でお目にかかれる事を楽しみにして居ります。

ふるって御参加下さい。

53期 本木　孝雄

同窓会　東京予定ナシ（五十嵐）
〃　高崎予定アリ（小池）
〃　一水会 近月中開始希望

56期 湯浅　潔　Tel.090-7829-3820

高高56会の皆様お元気でお過ごしの事と思います。令和3年の56会はコロナの為中止となりましたが、令和4年の新年の56会は例年通り行う事としたいと思っています。

御連絡いたします。

58期 佐藤　義夫　Tel.090-9810-5253

去る5月4日山口正敏君が逝去されました。S58年同窓会常任理事就任以来、約40年間当番同窓会の幹事や、期のイベント等いろいろと我々を引っ張って頂きありがとうございました。紙上をお借りし、同期一同感謝を込め謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

61期 友松　敬三　Tel.090-3064-8786

新型コロナウィルスの影響で、すべて休会です。酒も飲みたいし、うっかりすると三途の川で「しばらく！」と再会しかねないと存じます。早く皆元気で会いたいと言っております。同窓諸氏もお元気で！の感です。

62期 飯塚　孝　Tel.090-4590-5921

tksiz801@yahoo.co.jp

62期の皆さん、母校卒業後58年余が過ぎ多くの皆さんが喜寿を迎えられ益々お元気のことと存じます。コロナ禍で此度も62会開催は望むべくもなく次回こそは62会を開催し旧交を温められることを待望しています。

63期 羽鳥　修司　Tel.090-8683-0323

hatori-uonaka@dan.wind.ne.jp

元気な者しか集まれませんが、毎月末土曜日例会を開催しています。ゴルフコンペも毎月楽しんでいます。

ゴルフ連絡は松田勝090-3210-1559まで。

人生の終盤を楽しく元気に生きましょう！

64期 斎藤　直躬　Tel.090-1033-7683

国内初のコロナに関する報道は、2019年晦日です。爾来、64期の公式な同期会は実施されていません。但し、64期生は富岡市長を支え、小規模で集まっています。勿論コロナには十分注意し、同期生みな元気です。

71期 坂本　正樹　Tel.027-327-7717

nana710msaka172@docomo.ne.jp

指月庭（バラ園）の整備を指月庭倶楽部（会長高橋成東君）で、毎月第2・4日曜日午前9時から行っています（冬期は休み）。またゴルフ大会も行っています。宴席は当分自粛なので、屋外で活動しましょう。

72期 糸井　丈之（代理・事務局長　山県克実）

Tel.090-3140-4225　yamakatu1954@Gmail.com

我期も67歳となり、年金生活の者、まだまだ現役の者と生き方もそれぞれです。同期の下村博文君は自民党政調会長として、小此木清君は日弁連副会長として活躍しています。夏のゴルフや冬の同期会が主な集いですが、これから機会も増やしたいと考えています。

メッセージ ◆各期代表幹事◆

74期 秋山　賢治 Tel.090-3218-3966
aki-yama@xp.wind.jp

同期もいよいよ高齢者枠。ワクチン接種はお済みでしょうか?恒例の同期会は新年総会終了後に予定しますが、全体総会の開催と新型コロナ感染症の様子で… 皆様の元気な笑顔に会えますよう期待します。詳細はメールで。

76期 須郷　弘 Tel.090-3149-7299
hiroshi-s@daiwas.jp

七六期(七六会)は、夏期オリンピックパラリンピック開催の年に同期会を開催してきました。4年毎に会えていた七六会皆さん。元気か!!「あの頃行き」の電車にまた皆で乗り、肩を組み翠巒を歌おうぜ!その日まで元気で!!

77期 松本　基志 Tel.090-1604-4689
motoshi@able.ocn.ne.jp

卒業10年目から、夏のオリンピックに合わせて同窓会を開催してきましたが、昨年に続き今年も、残念ながら延期としました。早くコロナが収束し、皆で会える日を楽しみにしています。それまで、皆さんお元気で。

78期 高橋　浩生 Tel.090-3246-5547
toorih.e15-0108@dream.com

コロナ禍のため送別会も無いままに退職された方も多いと存じます。メールアドレスが変わり、78期メールが届いていない方は高橋浩生まで連絡下さい。スマホのGmailやiCloudメールでもOKです。

79期 藤田　実
m-fujita@mxa.fitenet.ne.jp

79期は今年で多くの人が還暦を迎えることとなりました。まだ多人数で集まれる状況にはありませんが、時期をみて皆なで盛大にお祝いを開きましょう。

80期 笹口　修男 Tel.090-8305-3805
mssasaguchi@m2.dion.ne.jp

日々マスクをつけ、職場ではアイシールドも愛用していますが、皆さんいかがですか。なかなか世の中が落ち着いてくれませんので、同期会ができるのか、今のところ、わかりません。この状況が克服できましたら、用心しながらですが、盛大にやりましょう。しばらくは"知者楽"で。

84期 粕川　泰彦 Tel.090-3479-4665
yas.kasukawa@gmail.com

今年の同窓会ゴルフ大会は84期が当番で開催します。5月22日にサンコーカントリークラブで開催予定です。徹底した感染対策で参加の皆さんをお迎えしたいと思いますので、同期の皆さんよろしくお願いします。

85期 富田　和弘 Tel.090-3214-3097
kaz@rise-hoken.com

85期懇親会は同窓会新年総会の後に開催したいと思います。同期の皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。参加お待ちしています。

87期 静　和彦 Tel.027-361-4165
shizukak@sea.plala.or.jp

87期の静です。「今春看又過何日是・・・」の一節が頭によぎる日々が続いておりますが、コロナ禍が終息したら、またみんなで飲み会やゴルフ会をやりましょう。それまで、くれぐれも健康に留意して頑張りましょう。

88期 亀田　慎也 Tel.090-3683-8931
kameda0816@gmail.com

このところ、同期の仲間が各方面で出世している話を聞きます。51歳ともなると、社内や社会的立場において、重要なポストを任されるようになります。同期諸兄の活躍を楽しみにしつつ、コロナの先を考える昨今です。

91期 市川　英久 Tel.090-7105-7406
ths.120th.reunion@gmail.com

2022年1月22日(土)に幹事期として我々91期が同窓会新年総会等を取り仕切ります。コロナ禍ですが、可能な限り万全の準備で臨みたいと思います。会場はGメッセ群馬!同期の力を結集させましょう。

通信制 山本　好一 Tel.090-2543-3014

令和3年度定期総会及び同窓懇親会を令和4年2月20日高崎高校会議室で行ないます。多くの会員の出席をお願いします。

私の仕事　71期

ローカルメディアの役割考え新聞づくり

上毛新聞社代表取締役社長・主筆
内山　充

「紙の新聞じゃあ時代にそぐわない。デジタルを強化すべし」「いや、それでは、かえって紙の新聞が読まれなくなる。ただの情報が氾濫するネットに切り込んでも採算が取れるのか…」

ほとんどのNEWSPAPERは世界中、大小問わず、発行部数と広告収入の落ち込みという難問に直面しています。さて、その対応です。堂々巡りの議論が沸騰しますが、決め手を欠いています。

私の仕事は上毛新聞社と関連会社の上毛新聞TR、上毛新聞アドシステム、3社の代表取締役社長としてグループ全体の利益を常に考えて、経営方針を立て、実行に移すことです。新聞社は報道がビジネスの柱であり、住宅展示場を売り上げのメインとするTR、広告代理店のアドの2社にとっても、新聞というバックボーンがあって初めてビジネスが成り立ちます。

上毛新聞の発行部数は27万5,000部（2021年8月）。人口減、少子高齢化、若者の新聞離れという逆境にあって、群馬県内で最大部数を維持しています。1887年、忍藩（現埼玉県行田市）剣術指南役で群馬県令楫取素彦と親交のあった篠原叶翁が創刊しました。以来、ほぼ毎日新聞発行を続け、幾多の先輩たちの努力によって読者の信頼を築いてきました。その信頼の基につぎの一手を考えるのが2018年就任、9代目社長の私に課せられた使命です。

一線の記者でありたいと思い続けていました。経営陣の一人に加えてもらい、ポストの重みが増す中で、覚悟も持って社長に就任しました。

高高2年時に面識のあった女高生が殺害された大久保清連続殺人事件、3年時に連合赤軍が人質を取って立てこもったあさま山荘事件がありました。1972年早稲田大学法学部に入りました。学園紛争が吹き荒れていて、内ゲバによる犠牲者も出ました。日中国交回復の立役者、今太閤と言われた田中角栄首相が金脈問題で首相の座を追われ、後にロッキード事件で逮捕されました。北ベトナムの猛攻によりサイゴン陥落、ベトナム戦争の帰趨は決しました。中東戦争、原油価格急騰、オイルショックに見舞われた日本経済に不況感が漂い始めました。私の近辺、そして日本、世界が騒然とする中で、私は新聞記者になりたいと考えるようになりました。

1977年入社時は、福田赳夫内閣でした。本社（前橋市）、と東京支社で広告営業を3年やり、1980年支社報道部に配属されました。26歳でした。支社の記者は私と支社報道部長の2人でした。5月16日、まさかの大平内閣不信任案可決。そして衆院解散、大平首相急逝、弔い合戦、衆参W選挙、自民圧勝…駆け出しの1年目の記者が右往左往しながら記事を書き、取材の過程で福田赳夫（21期）中曽根康弘（35期）両先輩と親しくさせていただき、お二人が築かれた政治、経済、文化、スポーツ界の人脈の一端にも接することができました。実に刺激的で貴重な経験を記者のスタート時点で得られました。福田赳夫、中曽根康弘、小渕恵三、福田康夫４首相と地元群馬の関わりを地方紙記者として見続けられたのも、この「80年」があったれば、こそです。

私は2021年5月15日、日本政治法律学会（白鳥浩理事長）から「政治および法律分野における貢献」を評価され、「報道学会賞」を受賞しました。中曽根さんの言葉に「結縁、尊縁、随縁」（縁を結び、縁を尊び、縁に随う）がありますが、まさに結んだ縁を大切に今日に至った結果であったと思います。

大学時代、新聞記者を志した私は高高、早稲田の先輩で毎日新聞社政治部記者の松田喬和さん（63期）を訪ね、同社社会部名物記者だった山崎宗次さんが塾長を務めていた山崎塾に入れてもらい、文章修業を始めました。いかに伝えるか。それには一定の法則があるという考えに基づき、テクニックを磨き、マスコミの入社試験に備えるという極めて実践的な勉強会でした。講師は手弁

当、山崎さんは有為な人材をマスコミ界に送りたいという信念を持っていました。『カンカラ作文術プロが教える合格文章の書き方』(山崎宗次著、光文社＝1984年刊)は、今も私の書棚の目立つ場所にあり、時々、目を通しています。

毎日新聞朝刊に連載された「宗教を現代に問う」(1975年9月16日～1976年12月20日、274回)の取材陣のメンバーで、山崎塾講師の一人だった前野和久さんが、1994年4月群馬大学社会情報学部教授に就任されました。当時、政治部次長デスクだった私は、学生時代とは異なりキャリアを積んだ記者として、前野さんと向き合うことができました。「語り継ぐもの—新聞記者が見た群馬100年史」「子どもたちと生きる　語る本吉修二」「魂の系譜　北米に賭けた上州人」などの長期企画を上毛新聞紙上で連載できたのも、先輩方のアドバイスと大学時代からの文章修業の蓄積があったればこそだと思います。

上毛新聞社は同大社会情報学部に講師を派遣していました。その中の一人だった私は取締役編集主幹の2013年、客員教授に就任しました。山崎塾の作文術に自分流の解釈を加えて学生に講義しました。前橋市中心商店街での座談会聴取、商店街取材、「市街地再生」をテーマとする作文提出、私の添削、学生のプレゼンテーション…と続く一連の特別授業は企画指導した私にとっても貴重な体験でした。2014年常務取締役役員室長となり、新聞社の経営に関わる比重が増す中で、客員教授を辞めました。

2021年9月から主筆も務めています。編集局、論説室の責任者として日々の新聞報道だけでなく、将来を見据え、皆さんに必要とされる新聞のあり方を社員と共に考える姿勢を鮮明にしています。

2019年1月8日にヤマダグリーンドーム前橋で開かれた上毛新聞社主催の新年賀詞交歓会で私は約1,000人の参加者を前にスピーチし、「課題解決模索型報道(the Solutions Journalism)」を新聞づくりの中心に置いて、ローカルメディアだからこそできる地域の身近な課題の解決に向け、読者、県民の皆さんと一緒に考え、その道筋を探る多面展開の報道を目指すと決意を述べました。私は主筆として、この考えを具体化し、またそのプロセスを通して力量のある記者育成を図っていこうと考えています。

私が新聞記者になったころは記者クラブで原稿用紙に鉛筆で記事を書き、バック便と呼ばれた係員の軽自動車で本社まで運んでもらう。東京支社は、記事はファクス、写真は共同通信社経由で本社に電送しました。それがワープロからＰＣへ、記事は原稿用紙に「書く」から、キーボードを「打つ」に変わり、記事も写真も現場から直接、送れるようになりました。

そして、平成、令和の時代(1989-2021年)は、世界を変えたＩＴ(情報技術)革命の波が新聞産業にも押し寄せ、少子高齢化とともに、業界を衰弱させる原因となっています。online版の設置を試みていますが、ネット上に蔓延する無料情報の中で、多くの社が苦戦を強いられています。

しかし、新型コロナウイルスのパンデミック発生以降、新聞広告収入は減少していますが、新聞が信頼できる情報源としてパンデミック以前よりも読まれているというデータがあります。新聞づくりの最前線にいる私もそう実感しています。

1970年代に青春を送り、ジャーナリズムの門をたたいた私と、2010年代以降に学生生活を送った若者とでは、生活環境が大きく異なります。しかし、新入社員に入社動機を尋ねると、現代が抱えるテーマに切り込んだ記事を書きたいというピュアな情熱を、特に社会人採用枠で入社した若者に感じます。

もちろん、記事を書きたいという情熱、努力、知識、忍耐だけではデジタル時代を生き抜いていけません。私たちが現場にいた時代はそれでもよかったのですが、これからの記者にはテクノロジーとビジネスに関する造詣が不可欠なのです。

上毛新聞社は起業家を発掘支援する「群馬イノベーションアワード」とプログラミング教育を推進する「ぐんまプログラミングアワード」を開催しています。デジタル時代に対応した主催事業に多くの社員が関わることで、記者のレベルアップは報道の根幹ですが、それにとどまらず、新ビジネスを構想し実現に向けて踏み出せる人材を育成したいと考えています。

私の役割は皆さんのお手元にあって、必要とされる新聞を次世代に受け継いでもらうことです。

上毛新聞社社屋〈1996年7月完成〉1階に多目的ホール、
玄関上に世界地図を描いた繭型のコクーン(特別会議室)がある。

事業報告 「先輩、教えてください!」

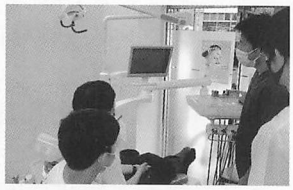
在校生が県内同窓生の皆様の職場にうかがい、職業に関する体験をさせてもらう進路学習事業が3年前より始まり、今年度は7月7日(水)に実施されました。受け入れてくださった同窓生の方々に、厚く御礼を申し上げます。

この事業は、在校生が講義や見学・実習を体験することで進路意識を高め、彼らが将来社会貢献できる人材となることを促す企画です。今年度も、「同業種の企業が多くある中で経営を成り立たせていくための工夫や苦労を伺い、今後社会人として生きていく意識を高める」ことをテーマとしました。当日は、本校2年生約270名が39箇所の職場を訪問しました(さらにコロナ禍により夏季休業中に1箇所訪問させていただきました)。受け入れてくださった6分野の同窓生の所感をご紹介します。

医療　しばやま歯科

院長　**柴山　佳行**(96期)

7月7日、七夕に3人の後輩に仕事を見学してもらいました。そう、優秀な後輩ばかりなので、先輩として教えられることは、勉強とかではなく、医療系の仕事って頭だけではなく心も使うんだよ!っという事です。1日では難しいかもしれませんが、何かを感じ取ってもらえれば有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。高校生活の大事な時間を割いてお越しいただき、ありがとうございました。また、先生方のご尽力にも感謝致します。



建設　株式会社　研屋

専務　**清水　正郎**(75期)

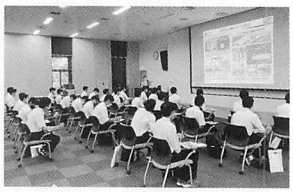
今回は4名の来訪を戴きました。先ずは生徒さんから建設業に対する事前学習の成果を発表して戴きましたが、そこには我が業界が抱える高齢化・労働力不足にも言及されており、大変内容の濃いプレゼンでした。地方の建設業は、その地域での繋がり、そしてその地域で暮らす人の理解と協力を戴くことに依り成り立つ職業であります。その繋がりの中でも「高高ネットワーク」が大きな存在であるとお話させて戴くと、4名の生徒さんには大きく頷いて戴きました。後輩たちとこの様な機会を戴いた事に感謝致したく思います。

教育・研究　高崎量子応用研究所

「研究者への道」

主幹研究員　**廣木　章博**(90期)

7月7日、30名の生徒が、(国研)量子科学技術研究開発機構　高崎量子応用研究所に来てくれました。量子ビーム照射施設を見学したあとの意見交換会では、最先端の量子科学技術とその未来社会について、色々とお話することができました。スマート社会の到来を楽しみにする一方、我が国の研究予算の現状(潤沢とは言い難い研究費)を憂う生徒が多いことに驚かされました。日本の将来を悲観せず、自らの夢・探究心を信じて、研究者への道を歩み始めてくれることを願ってやみません。



製造　株式会社　大利根漬

「さすが!高高生の感性は社会を動かす原動力」

代表取締役社長　**富澤　慎一**(99期)

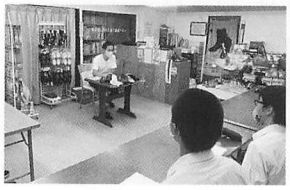
この度は5名の生徒さんがご来社下さいました。漬物製造会社=梅製品がどのようにできていくかを見学してもらうことで、地域資源である梅産業の理解を深めて頂きました。また、弊社の事業には高崎高校OBの方々との繋がりが多いことも伝えております。事前に生徒達が調査した業界の課題(仮説)に基づき意見交換をした際には、我々の社会的使命は何なのか、改めて考えさせられました。同時にこの素晴らしい感性が、将来大きな力となり地域に還元されていくことが今から楽しみで仕方ありません。ありがとうございました。

経営・情報　株式会社　トリオ

「感謝」

専務取締役　**吉村　祐二**(101期)

今年度で現役生の受け入れが3回目となりました。毎回、現役生の鋭い考えと発想を聞くことができる貴重な機会なので、とても楽しみにしていました。靴業界の現状と今後の動向についてよく調べてあったので、彼らの研究課題に対して十分な討論することが出来ました。短い時間ではありましたが、有意義な時間を過ごせたことに感謝します。この機会をきっかけに、小売業に興味を持つ後輩が一人でも多く増えてくれれば幸いです。



行政・法律　高崎市等広域消防局

「先輩、教えて下さい!」を受けて

総務課総務係 副主任　**大島　義史**(107期)

このたびは、当消防局にお越しいただき、ありがとうございます。新型コロナウイルス感染拡大のため施設見学や業務体験に制限があり、消防の魅力を十分にお伝えできなかったことが残念で、また、申し訳なく思っています。今回、事前に消防の業務や多様化する災害の対応等について調査いただきました。きわめて的確な分析と考察で、OBとして優秀な後輩が頼もしく思います。勉学多忙でなかなかその他のことに目を向けることが難しい中、こういった事業は素晴らしいと思います。微力ではありますが、今後も協力させていただければと思います。

令和3年 褒章・叙勲等受章者（期別50音順　敬称略）

総務大臣表彰	田端　　穣（54期）		旭日小綬章	采女　英幸（66期）	
瑞宝単光章	山口　保男（57期）		瑞宝中綬章	上原　　哲（67期）	
瑞宝双光章	中田　　洋（61期）		瑞宝小綬章	浅見　　薫（67期）	
瑞宝小綬章	斉田　真也（64期）		黄綬褒章	関口　　功（76期）	

文部科学大臣表彰　加藤　　聡（78期）＊加藤前校長は令和2年度に受章。

同窓会だより

第120回高中・高高同窓会新年総会・懇親会のご案内

91期　代表幹事
株式会社市川食品　代表取締役社長　**市川　英久**

同窓会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

第120回同窓会新年総会の当番幹事を務めます91期代表幹事の市川と申します。新型コロナウイルス感染症による影響で大変な状況ではございますが、来年1月22日（土）に第120回同窓会新年総会・懇親会を開催させていただきたいと存じます。

コロナ禍での対策に万全を期し、会場も例年と異なりGメッセ群馬での開催を予定しております。つきましては、ご多忙のところ恐縮ではございますが、多数の同窓生の皆様に新年総会・懇親会にご出席賜りたく、ご案内申し上げます。

なお、当日は万全の体制にて臨むべく準備を進めておりますが、新型コロナウイルス感染症防止対策等については、群馬県のガイドライン及びGメッセ群馬の利用基準に則って行います。したがって例年の新年総会・懇親会とは異なる短縮形式での実施予定となりますことをご了承ください。なお、ご来場の際にはマスク着用、手指消毒など感染予防対策にご協力をお願いいたします。

また、緊急事態宣言など、総会・懇親会の両方、または懇親会の内容の変更、あるいは中止の判断をせざるを得ない場合には同窓会ホームページ（takataka-ob.com）にて告知させていただきます。各位にて逐次ご確認いただきますようお願い申し上げます。

第120回 高中・高高同窓会新年総会のご案内
【日 時】 令和4年1月22日（土）
【会 場】 Gメッセ群馬（高崎市岩押町12-24）　TEL:027-322-2100
【会 費】 お一人様5,000円

新年総会：4F　大会議室　　15時より　（受付は2Fロビー）
懇 親 会：2F　メインホール　16時頃より（感染状況等により飲食を伴わない懇親会とさせていただく場合がございます）

※新型コロナウイルス感染症対策を徹底するため、下記のいずれかの条件を満たしていることを、総会および懇親会の参加条件とさせて頂きます。
・ワクチン接種を2回完了している　または、
・PCR検査または抗原定量検査の結果が陰性である
当日受付の際に、自己申告にて申請して頂きますので、ご協力よろしくお願いいたします。

翠巒文庫 BOOK（すいらんぶんこ）

◆翠巒文庫について◆　翠巒文庫は、著者または訳者が高崎高校の卒業生及び関係職員であり、本人またはその関係者から寄贈された図書で構成されています。

〈令和2年10月1日～令和3年9月30日〉

●著書／作者

- ●生き生き呼吸で元気よく …… 須藤　宜（49期）
- ●高崎市史断簡 …… 田島　佳男（51期）
- ●鳩山一郎とその時代 …… 中島　政希（71期）
- ●ベトナム考古学を学んで-フィールド調査28年 …… 菊池　誠一（72期）
- ●ベトナム革命の隠れた英雄　チャン・ヴァン・ザウの生涯 …… 菊池　誠一（72期）
- ●『鍼盲録』註解 …… 堀口　育男（79期）

母校だより

6月5日(土)・6日(日) 第69回 翠巒祭 テーマ「June Pride」

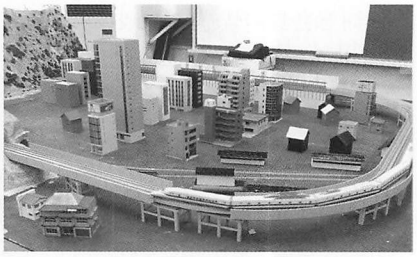
◀巨大壁画

アーチ

和太鼓部

吹奏楽部

新聞部



鉄道研究部

初めに、コロナ禍で無観客ではありますが、どうにか開催できたことをうれしく思います。我々の代で開催できなくなってしまうと、来年は全学年が翠巒祭を経験しないことになってしまいます。そうなれば、これまで連綿と先輩方から受け継がれてきた伝統が失われてしまいます。そのような事態がなく、今の1、2年生には「高崎高校の翠巒祭」をわかってもらえました。

無観客での開催ではありましたが、高高生が一丸となって過去の翠巒祭とも引けを取らない素晴らしい翠巒祭となりました。これもかなり前から準備をしてくれた多くの実行委員のおかげです。

最後になりますが、川田先生はじめ多くの先生方にご協力いただき、第69回翠巒祭を成功することができました。本当にありがとうございました。

実行委員長　3年 吉ノ薗　良太

●活躍部活動紹介

運動部

【陸上競技部】 令和3年度全国高等学校総合体育大会陸上競技　男子100m　第2位　井上 直紀

【柔　道　部】 第43回全国高等学校柔道選手権大会　男子個人81kg級　出場　オゾエメナ ソプル 涼太
第76回国民体育大会柔道競技　群馬県選抜正選手（大会開催中止）　オゾエメナ ソプル 涼太
第73回全国高等学校相撲選抜大会　総合の部　出場決定　港 壮史郎

学芸部

【英　語　部】 第59回全国高等学校生徒英作文コンテスト　入選　田村 健一郎

【文　芸　部】 第二回センバツ！全国高校生即吟俳句選手権　第5位　武 元気
第24回俳句甲子園 全国高等学校俳句選手権大会　個人賞　入選　齊藤 嘉大
第16回全国高校生短歌大会　出場　山岸 春貴　吉野 貴翔　齊藤 嘉大
第36回全国高等学校文芸コンクール　短歌部門　入選　本城 翔音　武 元気
俳句部門　優良賞　本城 翔音　入選　武 元気

【マンドリン部】 第45回全国高等学校総合文化祭　出場

【新　聞　部】 第45回全国高等学校総合文化祭　出場

【囲碁・将棋部】 第45回全国高等学校総合文化祭　出場

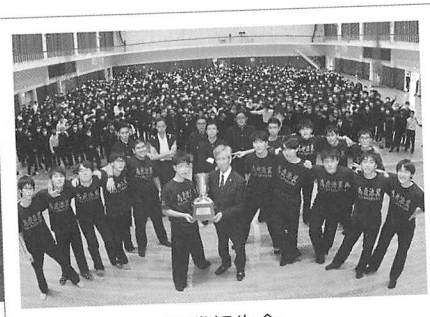
【鉄道研究部】 第12回全国高等学校鉄道模型コンテスト　モジュール部門　ベストクリエイティブ賞
モジュール部門　ベストライター賞
YouTube配信特別賞
第13回全国高等学校鉄道模型コンテスト　モジュール部門　ベストクリエイティブ賞
モジュール部門　ベストライター賞
HO車輌部門　加藤祐治賞

10月20日(水) 第75回 定期戦 「6連覇達成! 今年度も共同開催」

応援部顔合せ(於前高)

長縄跳び(於高高)

綱引き(於前高)



優勝報告会

今回は、高崎の6連覇が懸かっていたので、大きなプレッシャーがあった。そのため、勝利を知ったときはとても安心した。どの競技でも、高高生が練習の成果を出せていたことがこの勝利に繋がったと思う。今は、力を尽くしてくれた高高生や先生方、学校関係者の皆様に感謝したい。

ここまでの6連勝をおごりとせず、心を入れ替えて、競技を越えた協力をしながら日々の練習をしてほしい。そうすれば、勝利へのこだわりがより強くなり、7連覇を達成できるだろう。

実行委員長　3年 根岸　直輝

第75回定期戦得点表

部対抗		種目	一般対抗	
高高	前高		高高	前高
		駅伝	3	6
		綱引き	9	0
		玉入れ	3	6
		ソフトボール	9	0
		長縄跳び	6	0
		陸上競技	6	3
×	○	卓球	3	6
○	×	ソフトテニス	6	3
○	×	バレーボール	6	3
○	×	バスケットボール	5	4
×	○	柔道		
×	○	剣道		
×	○	弓道		
○	×	空手道		
×	○	サッカー		
○	×	硬式野球		
×	○	軟式野球		
○	×	テニス		
×	○	バドミントン		
		小　計	56	31

★今年度は日程の都合上、部対抗を得点化せず、一般対抗のみの得点集計で勝敗を競いました。
★これまでの戦績は高高44勝、前高24勝、引き分け3です。

卒業生合格者数(全日制)(　)内は現役

大学＼年次	3年	2年	令和元年	大学＼年次	3年	2年	令和元年	大学＼年次	3年	2年	令和元年
北海道大	10(10)	8(6)	16(11)	金沢大	14(12)	13(11)	15(13)	中央大	66(54)	32(22)	48(34)
東北大	22(22)	22(19)	23(15)	信州大	7(3)	6(4)	3(1)	明治大	57(39)	54(44)	49(30)
筑波大	4(3)	7(7)	6(4)	名古屋大	0(0)	3(3)	6(5)	上智大	8(6)	8(6)	7(3)
千葉大	6(3)	6(6)	8(5)	京都大	6(3)	5(3)	4(3)	立教大	14(11)	16(15)	12(8)
群馬大	34(31)	32(25)	32(26)					青山学院大	17(13)	4(4)	18(12)
埼玉大	10(8)	6(5)	3(3)	高崎経済大	13(12)	19(16)	24(24)	法政大	35(24)	37(30)	48(37)
東京大	3(3)	6(4)	7(4)	東京都立大(首都大)	2(2)	3(3)	2(1)	日本大	58(49)	46(29)	32(19)
一橋大	0(0)	1(0)	0(0)	国公立大医学部医学科	10(7)	9(8)	15(8)	東京理科大	50(39)	77(65)	63(43)
東京工業大	3(3)	1(0)	0(0)					芝浦工業大	70(54)	71(57)	67(50)
東京外国語大	3(3)	2(2)	2(0)					明治学院大	13(9)	4(3)	3(1)
横浜国立大	9(8)	6(5)	4(3)	慶應大	14(8)	22(15)	18(7)	同志社大	9(2)	13(8)	8(4)
新潟大	18(18)	20(16)	19(18)	早稲田大	31(24)	37(27)	29(10)	立命館大	36(26)	22(13)	21(12)

第27回高崎高校同窓会ゴルフ大会結果報告

◎前半9ホールのスコアで算出　ネットは新ペリア方式

■ 開 催 日　2020年5月23日(日)　■ 開催場所　サンコー72カントリークラブ
■ 参加人数　160名　■ 当番幹事期　83期

◀スタッフ用マスク

●団体戦(各期上位4名のトータルスコア)

《グロスの部》

順位	赤城	榛名
優勝	78期	81期
準優勝	62期	85期

《ネットの部》

順位	赤城	榛名
優勝	74期	81期
準優勝	62期	85期

優勝カップ

参加賞

●個人戦　《グロスの部》

順位	氏名	期	GROSS
赤城コース	田中　千秋	78期	37
榛名コース	渡邉　俊裕	81期	34

《ネットの部》

順位	氏名	期	GROSS	HDCP	NET
優勝	渡邉　俊裕	81期	34	0.0	34.0
準優勝	田中　千秋	78期	37	2.4	34.6
3位	猿谷　亮司	71期	42	7.2	34.8

『まん防』の真っ只中での大会となりましたが、大勢の皆さまにご参加いただき大変ありがとうございました。83期ゴルフ幹事一同

寄贈　マイクロバス

昨年度会報でお知らせしたとおり、同窓生皆様の協力金(一口1,000円)により、新マイクロバス(750万円)を購入し、同窓会、翠巒育英会、教育後援会共同で在校生に寄贈することができました。協力金を納めてくださった皆様には、厚く感謝申し上げます。

8月2日(月)に、坂本同窓会長、串田翠巒育英会理事長、松本教育後援会長のご臨席のもと、本校3F池前で贈呈式が行われました。このバスが学校関係諸活動で有効に利用されることを期待します。

令和3年度高崎高校人事異動

〈退任者・転出者〉

校　長	加藤　聡	定年退職
数　学	中川　浩之	定年退職
家　庭	岡田　典子	吾妻中央高
体　育	渡部健一郎	高校教育課
数　学	遠山　聡	高校教育課
理　科	岡田　一郎	吉井高
公　仕	櫻井　豊	勧奨退職
公　仕	大久保健一	前橋南高

〈新任者・再任用者〉

校　長	小林　智宏	高校教育課長より
数　学	中川　浩之	再任用教員として任用
家　庭	中野　英子	伊勢崎興陽高
体　育	小澤　朋克	太田高
数　学	岡田　一輝	中央中等
理　科	岡田　直之	藤岡中央高
公　仕	北原　信吾	万場高
公　仕	下田　裕介	前橋南高

通信制

〈退任者・転出者〉

国　語	神保　昇一	定年退職
理　科	小和瀬尊信	赤城特本

〈新任者・再任用者〉

国　語	神保　昇一	再任用教員として任用
理　科(地公臨)	根岸明日香	あさひ特支

同窓会本部 INFORMATION

◆今年度も昨年に引き続き新型コロナウイルス感染者の増加が収まらず、以下のイベントが中止となりました。

同窓会新年総会(1月)関西翠巒会(2月)、藤岡翠巒会(7月)、東京同窓会(10月)、榛麓翠巒会(11月)

◆第2回常任理事会、第1回理事会は書面での開催(議事書面はホームページでの配布)となりました。

令和4年1月22日の同窓会新年総会は、Gメッセ群馬での開催と決まりました。(詳細は91期挨拶に記載)

◆2022年版同窓会員名簿が発行されます。(1月末)

申し込みをお忘れの方は(株)サラトに連絡お願いいたします。

0120-975-875　受付No.220105(9:30～16:00)土・日・祝を除く

◆維持会費 納入者数 推移

いつもご協力いただき心より御礼申し上げます。

期	R1	R2	R3
通信	41	25	33
定時	14	11	11
35	1		
36			
37		1	1
38			
39			
40	1	1	
41	4	5	1
42	1	1	1
43	1	1	
44	5	5	4
45	10	7	6
46	21	9	9
47	7	6	3

期	R1	R2	R3
48	4	5	3
49	30	24	18
50	28	26	25
51	29	28	24
52	38	35	35
53	35	36	33
54	51	52	46
55	44	46	44
56	54	58	57
57	48	57	51
58	45	54	57
59	58	55	59
60	54	60	52
61	55	63	64
62	61	61	68

期	R1	R2	R3
63	55	63	64
64	54	47	43
65	52	49	54
66	53	61	57
67	53	56	53
68	37	42	44
69	75	72	77
70	50	57	62
71	50	58	57
72	58	57	73
73	48	56	75
74	49	48	44
75	44	59	55
76	54	59	59
77	47	49	45

期	R1	R2	R3
78	55	53	52
79	51	46	58
80	54	69	67
81	45	60	66
82	68	65	53
83	36	34	41
84	40	35	46
85	53	49	55
86	45	45	42
87	50	45	47
88	137	53	38
89	78	54	45
90	59	58	44
91	31	30	50
92	24	25	29

期	R1	R2	R3
93	11	15	12
94	20	13	13
95	9	9	10
96	15	13	15
97	12	13	14
98	7	9	10
99	13	16	22
100	9	12	12
101	10	15	14
102	11	11	10
103	12	13	11
104	14	12	12
105	12	11	9
106	23	25	24
107	17	10	12

期	R1	R2	R3
108	15	15	13
109	16	10	9
110	13	11	8
111	16	12	9
112	21	17	15
113	21	22	20
114	29	24	23
115	19	17	18
116	27	26	29
117	44	31	27
118		25	20
119			32
計	2,761	2,694	2,725

〈令和3年11月15日現在〉納入合計額10,670,000円（昨年同期7,890,920円）

翠巒育英会　歴代役員名簿

《平成9年～平成11年》

役職	期	氏名
理事長	38	重田　精一
副理事長	47	須永　孝
〃	50	國峯善次郎
〃	50	横田　英一
常務理事	51	田中　順

《平成12年～平成17年》

役職	期	氏名
理事長	50	横田　英一
副理事長	45	安藤　直典
〃	50	國峯善次郎
〃	51	田中　順
常務理事	54	田端　穣

《平成18年～平成19年》

役職	期	氏名
理事長	56	原　浩一郎
副理事長	45	安藤　直典
〃	50	國峯善次郎
〃	57	佐藤　和徳
常務理事	58	若山　享

《平成20年～平成23年》

役職	期	氏名
理事長	57	佐藤　和徳
副理事長	45	安藤　直典
〃	50	國峯善次郎
〃	58	大木　紀元
常務理事	58	若山　享

《平成24年～平成27年》

役職	期	氏名
理事長	54	田端　穣
副理事長	58	大木　紀元
〃	67	串田　紀之
常務理事	58	若山　享

《平成28年～令和元年》

役職	期	氏名
理事長	67	串田　紀之
副理事長	69	阿久沢　茂
〃	71	坂本　正樹
常務理事	73	中村　康晴

《令和2年～令和3年》

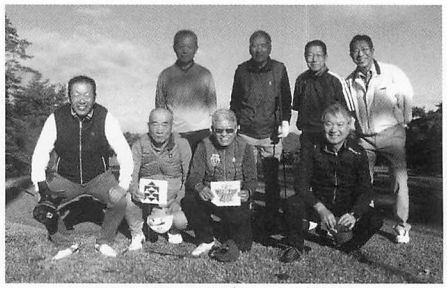
役職	期	氏名
理事長	67	串田　紀之
副理事長	71	坂本　正樹
〃	75	清水　正郎
常務理事	73	中村　康晴

◆各地区同窓会　報告及び連絡先◆

◆関西翠巒会について

連絡先：関西翠巒会会長　宮崎 和典　090-3701-8013

私は67期卒で、20歳の時来阪し、関西在住も、もう52年になります。当会も、その頃から始まったと聞いておりますが、資料が残っていないため詳しい説明が出来ず、申し訳ありません。現在、20人前後で活動しております。関西と言っても殆ど大阪府で、あとは京都、奈良、兵庫県の方です。やはり遠方からの参加は難しいのだと思います。数年前に、平成29年発行の本部同窓会会員名簿で65期卒から40年間の関西在住者を調べたところ、約250人程居ました。1学年5～6人と言う所です。平成29年以降は名簿にも載っていませんので、もう少し人数は多いと思われます。活動は総会（高崎3校（高高、高商、高工）新年会を兼ねています）、他に宴会 1～2回、ゴルフが年2～3回と言う所です。昨年より前高卒業生とのゴルフ定期戦が始まり、高高が連勝しています。当会もご多分に漏れず高齢化が進んでおり、会の存続には若い方の参加が不可欠です。もし、お知り合いの方で関西在住の方、あるいは転居予定者がおりましたら、是非、当会の存在を教えてください。これからも高高の名に恥じないよう活動を続けたいと思います。宜しくお願いします。



前高OBとのゴルフ定期戦

◆藤岡翠巒会より

連絡先：66期　福島直人　090-1846-9477

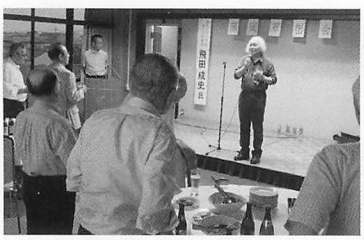
藤岡翠巒会は平成19年に誕生し、今年で14年になります。現在、藤岡在住者110名、各地の藤岡出身同窓生20名が会員です。49期から103期までと幅広く、各期数名ずついて、中央値は70期です。

毎年6月に、「総会・講演会・懇親会」を藤岡商工会議所で開いています。講演会には特に力を入れていて、今まで恩師の久保誠二先生、峰哲彦先生、会員の識者5名、会員友人の同窓生5名、会員の友人4名（オランダ人化学者1名）を講師に迎え行いました。

また、会報を年1回発行し、今年で４号になります。今年はコロナ禍で昨年に続き会合が開けなかったため、会報への投稿を広くお願いしたところ、10名から45ページに及ぶ作品が寄せられました。在校時の苦くも楽しい思い出や、探究中のテーマの一端、趣味の話などと多岐にわたるものです。

しかし、同窓会の楽しみはなんといっても酒食を共にする懇親会です。毎回35～50名が集い、同窓の誼ですぐに打ち解けあい、互いに世代を超えた多くの新しい友人ができたと思います。最後は「校歌、翠巒、クラス会の歌」を熱唱しお開きとなります。

会報には在庫があります。ご希望の方はご連絡ください。



講演会後の懇親会

翠巒を高らかに熱唱

藤岡翠巒会報

ご案内

―企画展―「ゆるぎの美学」　巨石彫刻家　故 半田 富久氏（54期）

場所：安中市　学習の森ふるさと学習館（火曜休館）
期間：令和3年11月3日（水）～令和4年1月24日（月）　午前9時～午後5時

高高同窓会　予算決算報告

令和2年度　通常会計決算（令和2年1月1日～令和2年12月31日）

収入の部

費目	予算額	決算額	差引増減	備考
繰越金	365,597	365,597	0	前年度繰越金
入会金	2,852,000	2,848,100	△ 3,900	全日制279名（@9,900）通信制43名（@2,000）
維持会費	8,150,000	7,793,141	△ 356,859	2,750名（常任理事10,000、理事5,000、一般2,000）
利息	－	－	－	
雑収入	382,403	690,633	308,230	Webサイト協賛金・記念品収入・特別会計より
合計	11,750,000	11,697,471	△ 52,529	

支出の部

費目	予算額	決算額	差引増減	備考
会議費	1,270,000	1,839,878	△ 569,878	新年総会準備ほか
祝賀費	1,000,000	872,212	127,788	叙勲・卒業記念品ほか
餞別費	180,000	185,214	△ 5,214	令和元年度末離退任職員餞別
慶弔費	70,000	191,880	△ 121,880	供花
通信印刷費	500,000	319,645	180,355	維持会費督促状・納入礼状・翠巒会館電話代ほか
旅費	240,000	0	240,000	
同窓会報費	4,300,000	4,374,211	△ 74,211	同窓会報発行費および発送費
事務費	1,450,000	1,512,718	△ 62,718	事務局職員人件費・事務用品他
同窓会長賞費	100,000	125,400	△ 25,400	賞状・記念品ほか
資料整理費	200,000	79,200	120,800	Webサイト管理費ほか
補助費	1,450,000	1,259,102	190,898	翠巒体育会・生徒活動補助・WiFiレンタル・ハンズフリーマイク
環境整備費	500,000	329,928	170,072	指月庭及びバラ園の維持管理費
雑費	450,000	279,767	170,233	維持会費等の振込手数料ほか
特別会計積立	0	0	0	
予備費	40,000		40,000	
合計	11,750,000	11,369,155	380,845	

収入総額　－　支出総額　＝　差引残額
11,697,471円　11,369,155円　328,316円（次年度へ繰越し）

特別会計

収入の部	前年度繰越金	8,912,008円
	令和2年通常会計から	0円
	雑収入	833円
	合計	8,912,841円
支出の部	母校充実費	352,000円
	新年総会準備金補充	500,000円
	合計	852,000円

収入総額　－　支出総額　＝　差引残額
8,912,841円　852,000円　8,060,841円（次年度へ繰越し）

事務職員退職金積立

令和2年通常会計（事務費）から	60,000円
合計	60,000円

事務職員退職金積立（令和2年末　300,000円）

令和3年度　通常会計予算（令和3年1月1日～令和3年12月31日）

収入の部

費目	今年度予算	前年度予算	差引増減	備考
繰越金	328,316	365,597	△ 37,281	前年度繰越金
入会金	2,852,000	2,852,000	0	全日制280名（@9,900）通信制40名（@2,000）
維持会費	11,150,000	8,150,000	3,000,000	3,000名（常任理事10,000、理事5,000、一般2,000）
利息	－	－	－	
雑収入	249,684	382,403	△ 132,719	Webサイト協賛金・記念品収入名簿収入・利息ほか
合計	14,580,000	11,750,00	2,830,000	

支出の部

費目	今年度予算	前年度予算	差引増減	備考
会議費	1,270,000	1,270,000	0	新年総会準備ほか
祝賀費	350,000	1,000,000	△ 650,000	叙勲・東京同窓会他
餞別費	180,000	180,000	0	令和2年度末退職職員餞別
慶弔費	70,000	70,000	0	供花
通信印刷費	370,000	500,000	△ 130,000	維持会費・理事会通知・翠巒会館電話代ほか
旅費	200,000	240,000	△ 40,000	東京同窓会等旅費
同窓会報費	4,380,000	4,300,000	80,000	同窓会報発行費および発送費
事務費	1,500,000	1,450,000	50,000	事務局職員人件費（退職金積立60,000）、事務用品ほか
母校支援費	2,000,000	100,000	1,900,000	
①同窓会長賞	100,000	100,000	0	文鎮
②入学卒業記念品	1,000,000		1,000,000	ネクタイピン・卒業証書ホルダー・トートバック
③諸活動補助	900,000		900,000	SSH・部活動補助・演奏会等生花
資料整理費	100,000	200,000	△ 100,000	Webサイト管理費・各会報のデジタル化費用
補助費	350,000	1,450,000	△ 1,100,000	翠巒体育会補助等
環境整備費	400,000	500,000	△ 100,000	指月庭維持管理費
雑費	400,000	450,000	△ 50,000	維持会費等の振込手数料ほか
特別会計積立	3,000,000	0	3,000,000	
予備費	10,000	40,000	△ 30,000	
合計	14,580,000	11,750,000	2,830,000	

特別会計

収入の部	前年度からの繰越金	8,060,841円
	令和3年度通常会計より	3,000,000円
	利息	159円
	合計	11,061,000円
支出の部	母校充実費（マイクロバス更新費用他）	8,000,000円
	合計	8,000,000円

収入総額　－　支出総額　＝　差引残額
11,061,000円　8,000,000円　3,061,000円（令和3年末）

事務職員退職金積立

令和3年通常会計（事務費）から	60,000円
合計	60,000円

事務職員退職金積立（令和3年末　360,000円）

同窓会維持会費納入、翠巒育英会ご寄付のお願い

同封の振込取扱票により、コンビニエンスストア、郵便局にての納入をお願い致します。郵便局振込につきましては、令和4年1月17日より110円振込者負担の値上げもございます。出来るだけコンビニエンスストア振込またはホームページよりのクレジット払いの活用をお願い申し上げます。

群馬県立高崎高等学校
同窓会報

【発 行 人】 坂本正樹(71期)
【編集委員】 田端 穣(54期)
吉永哲郎(54期) 大木紀元(58期) 若山 享(58期)
立見友孝(63期) 波多野重雄(77期) 新井重雄(78期)
竹内 聡(79期) 花井好機(82期) 反町 豊(99期)
菊地将史(107期)

編集後記

同窓の皆様の多大なるご協力をいただき、会報第55号が発刊できました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。御多忙の中、貴重な原稿やお写真をお寄せくださいまして、誠にありがとうございました。(編集委員)

【編集委員からのお願い】
同窓会報1号(1967年)～6号(1972年)をお持ちの方がいらっしゃいましたら、同窓会事務局までご連絡ください。

群馬県立高崎高等学校 同窓会事務局
〒370-0861 群馬県高崎市八千代町2-4-1 TEL&FAX 027-320-6024 Eメール:suiran@email.plala.or.jp